

したい。現在も多くの留学生を受け入れている千葉大学留学生センター・指導相談部門の専任教員としては、多分に今日の日本留学生の母国での状況や日本での問題などを身近に実感できる立場におられることであろうと考える。現代の問題を取り纏めて歴史としてだけでなく、今後の日本の留学生教育に切り込んだ論考を読ませていただきたい。

留学・遊学は近代・現代に限っても一人一人にとっては大変な経験である。母国へ何かを学んで持ち帰る意識は人生の中の一時代として、本人にとり多くは重圧である。一方、母国や留学先の状況を自らはどうすることも出来ない事が多い。そのような中で国際的な智の交流は行われてきて現代の世界がある。開国以後の日本からの留学生が多く欧米を目指してきた。その一方では、アジアからの留学生が日本を目指した歴史の一端を本書は明らかにしてくれた。

医薬学の分野に於ける千葉医学専門学校に始まる留学生受け入れの歴史が大部を占める本書を本雑誌の書評として取り上げた理由でもある。

「五校特約」の一翼として官費留学生の記録が

よく残る千葉大学に於いて行われた仕事であるが、それにとどまらない私費による日本留学生も多数いたことも触れられており、その留学生の研究も深まることを期待したい。くりかえしとなるが留学生という立場は、大変に不安定なものである。それを受け入れる留学生と、その留学生に対応する留学先があり、性善説の成り立つ事を前提とした国際交流である。日本からの欧米への医学分野の留学生の個別研究は多く目にするが、本書のような体系的な研究はあまり目にすることが少ない。

東アジアに於ける近現代日本の留学生受け入れの歴史としてまとめられた著者の研究が大成することを期待したい。本書『留学生は近代日本で何を学んだのか』は「留学生は何を学ぶのか、何を学んだのか」という近現代世界に共通する命題の一部をなすと考える。

(渡部 幹夫)

[日本経済評論社、〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-7-7、TEL. 03(5577)7286、2018年3月、A5判、296頁、3,700円+税]

青木歳幸・大島明秀・W・ミヒェル 編 『天然痘との闘い——九州の種痘——』

嘗て日本人は天然痘と妻まじい闘いを繰り返し、嘉永2年(1849)に長崎へ到来した牛痘種痘法を驚異的なスピードで全国に伝播させた歴史をもっている。

本書は青木歳幸氏を研究代表者とする文部科学省科学研究助成金・基礎研究(C)「九州地域の種痘伝播と地域医療の近代化に関する基礎的研究」(平成27-29年度)の成果をもとに編集し、刊行されたものである。本研究の先行論文として井上忠「種痘法の傳搬過程—科学文化史の一こま—」(『西南学院大学文学論集』第3巻、1957年)が挙げられるように思う。以下井上論文と対比させながら研究の軌跡を探ることとする。

本書は序章、総論、各論、終章、あとがきとい

う構成である。総論では種痘の歴史を正しく理解するのに欠かせない事項が5つの観点、即ち天然痘、人痘法の展開、ヨーロッパ人が観た日本における天然痘、牛痘伝来前史、牛痘伝来再考、からまとめられている。

各論では、九州地域の2幕府領・11藩領における種痘が12人の執筆者により分担執筆されている。本書の性質上史料本位の処があるため、論文の切り口は多様である。試みに各論文を次の3つのグループに分けて略述してみたい。それは人伝牛痘苗による種痘普及活動の成否に藩の種痘行政が深く関与していることを意識したものである。第1のグループ：主に藩の種痘行政に係る視点で記述された論文には4編が該当する。佐賀藩

では、佐賀城下への種痘の導入と領内での種痘活動が刻明に検証されている。藩の正しい引痘方設置時期及び最初の城下町引痘場所が明らかになり、領内への種痘活動は引痘方医師の巡回種痘により計画的に行われた。種痘活動の実態は小城藩領の有力農家の「山本家日記」及び引痘方医師松尾徳明『引痘方控』により検証され、「佐賀藩の藩費による種痘普及活動は、近代における公的機関による地域防疫活動の先駆的な組織的な活動であった」(144頁)と評されている。多久領の種痘活動は『御屋形日記』や松尾徳明『引痘方控』等により検証された。九州に隣接する長州藩では、済生堂(医学館)会頭役の青木周弼が中心となり、早々と済生堂を種痘接種場所として種痘を開始し、領内全域で整然と実施された。このことはすでに井上忠論文でも紹介されている。大村藩は度重なる天然痘の侵入を被ってきただけに、牛痘到来には迅速に対応した。数の限られた牛痘苗を効率よく領民全体に接種してゆくため、痘家長与俊達(専斎の祖父)の上申等を受けた藩の諸政策には先進性が見られた。第2のグループ：主に種痘の普及に直接係わった人々の活動を記述した論文には5編が該当する。小倉領では、大庄屋の『中村平左衛門日記』及び『小森承之助日記』を通し、種不足に悩む種痘活動の実態が検証されている。再帰牛痘法さえ試みられた。中津藩では、牛痘苗に逸早く対応した町医辛島春帆・長齢らと儒医村上姑南が長崎と佐賀で痘苗を入手し、嘉永3年から豊前・豊後で初の牛痘接種を開始した。姑南は次第に医療から離れたが、後に民間の医学館設立運動につながった。幕府領の天草では、富岡役所や大庄屋からの求めに応じ、日田代官所から急遽派遣された種痘医木下逸雲の優れた種痘活動等が紹介されている。薩摩藩については2編の論文がある。ひとつは高岡郷の「黒江家文書」中にある親子2代の医師、黒江循介・綱介に焦点をあてたものである。綱介は諸役から鹿児島出府を命じられ、種痘医前田杏齋の許へ赴き、嘉永3年2月に

2週間の種痘稽古を終えるや、直ちに帰郷して種痘を開始したが、6月には大坂の適塾に向かった。もうひとつは種痘術の藩領内普及について、執筆者が「種子島家譜」や「黒江家文書」に加え、秀村選三「高山郷史料覚え書若干」を知るに及び、前田杏齋から種痘術を授けられた地方の医者は、まだまだ数多くいたであろうと考えるに至った。第3のグループ：主に個人の事績を紹介した論文には4編が該当する。福岡藩では、武谷祐之の事績が論じられている。彼は適塾で種痘に関心を抱き、鞍手郡の1郡医として種痘を始めたが、程なく種痘を願う大勢の人々を残し、種痘から離れて藩主の御匙医となり、藩内の医療政策や医学教育に力を尽くした。久留米藩では在村医熊谷文叔、また熊本藩ではよく知られた高橋春圃と寺倉秋堤の事績が述べられている。宮崎では、蘭方医若山健海の筆とされる「種痘人名録」の実見調査の結果が紹介されている。執筆者の種痘人名録の読み方と考察は興味深い。

以上、各論を3つの視角でまとめてみると、諸藩の種痘行政の実態、種痘の普及に直接かかわった人々(藩の引痘医師、町在の協力医師、彼らと庶民の間をとりもった村役人等)の苦悩と試練を伴う活動の実態、また藩の援護なしで種痘に挑戦し、恐らく挫折したと思われる医師の実態が、数々の新しい史料に基づき、実証的に示されていることがわかる。本研究の主題の解明に大きな進展と成果があったと考えられる。

本書は、井上忠氏が自らの論文を「素描」だと断った段階から離脱し、60余年かけ積み重ねられた研究の成果が詰まったモニュメントだとも言える。「あとがき」で編者が語っているように、この方法論を全国諸地域に拡大し、実証的な研究が進展することを期待したい。

(鈴木 友和)

[岩田書院, 〒157-0062 東京都世田谷区南烏山
4-25-6-103, TEL. 03(3326)3757, 2018年6月,
A5判, 342頁, 7,200円+税]